

の健闘を行く末永い前途の幸福を念願して決別の辞とする。

さらば諸子よ 出発だ 出発だ

復員の鐘が鳴る 否復興の鐘が鳴る

親愛なる諸子よ、御機嫌よう 諸子及び諸子の家族と共に一路平安を祈る

昭和二十一年二月二十五日

この連隊長の決別の話は静かではあるが落ち付いてはつきりと伝わって来た感じで、あの時の重広連隊長の眼は慈父の眼のようでした。その時の連隊で生き残った人は約九〇〇人だったと聞いています。

四月になって青島に向かって済南を出発、青島港から米軍の上陸用舟艇に乗り、四月二十日に佐世保に上陸しました。その時、つくづく、「国破れて山河あり」の詩を実感しました。

〔聴取に際し、菊地卯三の戦友（第五中隊）小野寺秀雄氏の助言があり、感謝します〕

軍医敗戦記

東京都 山崎義郎

―最初に簡単な軍歴を聞かせて下さい。

昭和十六年十月六日に、近衛歩兵第一連隊に軍医予備員教育のため衛生上等兵として入隊しました。

普通の兵科と異なり軍医になるための予備教育なので、いわゆる内務班教育というものはなく、従って往復ピンタとか鷲の谷渡りとかは味わったことはありません。習うことも学校で習ったことの復習のようなもので、後で見たり聞いたりした兵科の初年兵教育とは雲泥の相違でした。

教育期間も約一ヵ月ということで気分的にも楽でした。前期が隊内教育で、後期は世田谷の第一陸軍病院内の実地教育でした。

当時、日米間に暗雲が垂れこめ一触即発の情勢でした。下手をすると除隊、即日召集という事態になるか

も知れないと秘かに覚悟だけはしておりました。

―教育期間中一番印象に残ったことは何でしょうか。

私ごとで恐縮ですが入営して三日目に弟が畔上中尉（府立九中の同期生）と二人で面会に見えました。入営早々なのにと異様な感じがしましたが、早速、面会所に向きました。夢想だにしなかったことでショックでした。父が七日の午後散髪中、脳溢血に襲われ数時間後に死去したとのこと。父は平生から血圧が高く、血圧を計りながら酒類を控え目に飲んでいたので、私が入営で二日ばかり宴会が続いたのが響いたのでしょう。

十二時間の特別外出の許可を得て、九日の葬儀に列席しましたが、霊柩車の中で位牌を持ちながら止めどなく涙が出たのを今でもはっきりと思います。二度目の召集で大陸で何十人、何百人の臨終に立合いましたが父の死はまた格別でした。

昭和十六年十月三十一日、教育も終了し、衛生軍曹として無事除隊しました。二十五日間の教育期間でし

た。

―二度目の召集はいつですか。

昭和十九年七月十五日、山形の歩兵連隊に入りました。

第一回の除隊後、入隊前から勤めていた病院に復職しました。

ご存知のように十二月八日未明、日米戦争が勃発し、文字通り亜細亜・太平洋戦争となり、世界戦争に突入しました。

召集直前、縁あっていまの家内と結婚しましたが、新婚の夢さめない中の召集令状でした。

―二度目の任地はどちらでした。

大陸です。昭和十九年十一月に弘前師団（弾部隊）山形連隊の隊付衛生部見習士官（二十七歳）として下関に到着しました。下関では衛生兵を連れ内地最後の花街を冷やかしたのも思い出の一つです。

大本営発表は勇ましかったが、もう日本の近海には敵潜水艦が出没し、玄界灘を渡り釜山に着くまでは冷や冷やの連続でした。

釜山に上陸しほつとすると共にようやく落ち着いて、周囲の風物を見ることが出来ました。土の色といい、黒い豚といい驚くことばかりです。大隊本部將校一同で米を持込み、釜山郊外の東來温泉で豪遊したのが宴会らしい宴会の最後でした。

海上輸送が危険な時、大陸縦断鉄道が文字通り輸送の大動脈で、極言すれば釜山から漢口まで貨車が数珠繋ぎという有様でした。

朝鮮を過ぎると北支・中支と占領地ごとに紙幣を交換するのに一驚。また中支を行軍中、場所により岩塩しか通用しないのは驚かされました。その中、先発の列車が停滞し、順徳に降るされ、占領地といつても点と線しかないということをイヤというほど思い知らされました。

出発の時は冬なのに、給食に基因すると推測されますが集団赤痢が発生し、一車両目から四十五車両目の間を往復し手当をするのに大奮闘でした。他部隊の軍医は麻薬中毒、病兵は濁水と下痢で、とても少人数での手当はゆきとどかず、黄河の要衝、鄭州の陸軍病院

に送り届けました。

一軍医と兵科將校の苦勞の相違は何でしょう。

質の相違でしょう。戦闘があれば兵科將校が苦勞し、戦闘終了後は軍医が戦死傷者の手当で苦勞する。行軍中の苦勞は全く同じですよ。

揚子江を渡河し、武昌から米軍の空襲を避けて一カ月の夜間行軍です。しかも四十キロの背囊を背負っています。

一見習軍医は何時も衛生部員、担架兵と共に救護班として部隊の最後尾で、到着後は休む間もなく診断廻りです。

背負った鉄兜につけてたらしめた白布が目当ての夜行軍で、雨の時は禪まですぶ濡れになり、またぬかるみに足を取られ、疲勞の極、ちり紙一枚でも捨てたくなくともありました。

尖兵小隊が道を間違えたものと思いますが、北支の信陽付近の真冬に大休止が長かったため多数の凍傷患者が出て、急遽、野戦病院を開設した苦い経験もありました。凍傷は耳と四肢の指で、火傷に似て第三度(壊

疽)までありました。

最前線にでると生きるため山賊盗賊まがいのことまでやりましたが、主計将校が後払いの紙を張って歩いていたのはお笑い草でした。馬を持っている砲兵・歩兵砲小隊・機関銃小隊・輜重隊の苦勞には頭が下がりました。

ある時第一線で味方の数中隊が包囲され、竹中大隊長に出撃を命じられ、当番兵・衛生兵等を連れて山頂に登りました。蝸壺を掘る暇もなく小隊長の蝸壺にとびこみました。激しい銃爆撃の後、チャルメラの音と共に国府正規軍に突撃された時はもう駄目と思えました。迫撃砲のヒルヒルスーンという音が一番怖かったですね。幸い准尉が手兵を引き連れ白兵戦で敵を追いかけて落してくれほっとしました。しかし、このままでは中隊は全滅するので、胸部貫通銃創の見習士官以下数名を率い、暗くなるのを待って下山しました。途中道に迷い士官も死亡したので軍刀で手首を切断、川を目当てに後退し、大隊本部に合流しました。

行き違いに大隊本部から撤収命令が出ておったので

すが、すでに多数の死傷者が出た後でした。大隊本部で仮眠後、民家で包帯所開設を命ぜられ、治療(全員にガス壊疽・破傷風血清)給食・死亡者の埋葬等で三日三晩不眠不休の活躍でした。手当の甲斐もなく死んでいく兵を見て涙がぼろぼろでて困りました。

慈恵医大出の高級医官秋山博愛中尉が私宛の連絡文書を起案中にP51の射撃を受け、腹部貫通銃創で戦死したのはかえすがえすも無念でした。

敗戦の報に接したのは湖南省の毛沢東の出身地に近い湘潭という所でした。呆然自失、なすすべもないという心境でした。一方、やれやれこれで内地へ帰れると思ったのも事実です。兵科将校の中に全員玉砕だと悲憤慷慨した者もいましたが、自決者は一人もおりませんでした。

終戦後も一苦勞も二苦勞もありました。集結地に行軍中虫垂炎(ガッカリアップ)になり、長沙陸軍病院に入院手術。部隊から取り残され、しかも病院が閉鎖になり抜糸もせずお坊さんや当番兵と共にトラックで部隊を追及した時はこれで私の人生も終わりかと思

ました。

追跡中にマラリヤ・赤痢・栄養失調の患者が多数出て、途中死ぬ者も多く、生き残った者は岳陽から武昌の大病院に転送され、ここで武装解除されました。私是不運にもシラミのため回帰熱にかかりましたがサルバルサン二本で助かりました。

武昌の墓地で部隊に追及しました。天幕生活のため、コレラ・天然痘（仮痘）が発生し、そのためまだ日本軍が管理した漢口の陸軍病院まで渡舟に乗って行き、痘苗等薬品を秘密で分けてもらい助かりました。

漢口の在留邦人も売り食いで、辛うじて飢えをしのごとくという状況で苦勞していました。道路補修のため王陽明の百福寺の近くに行つた時は手持ちの薬で中国人の治療を行い、食料を稼ぎ、部隊のために大分貢献しました。

蘇東波の赤壁賦で有名な揚子江沿岸の黄岡で長い捕虜生活をしましたが、チブス性疾患、回帰熱等に罹かつた兵が医薬品の欠乏のため帰国を眼の前にして、望郷の涙を流しつつ亡くなつていくのを見るのは大変辛

いことでした。

待ち恋がれた船で南京まで下り、そこから暴民の襲撃に怯えながら上海に無事到着した時は、ほっとしました。二年ぶりで水道の水を飲み明るい電灯の光をいつまでも眺めていました。復員船に乗るまでシラミ取り競争と検便二回（コレラ流行）をやりました。しかし私は乗船地司令部に残留を命ぜられました。一瞬戦犯かと心配しましたが中支最後の復員船LSTで昭和二十一年七月、無事久里浜に上陸しました。

乗船地の司令部にいたお陰で五年ぶりで陸軍中尉の弟に会え、松井元軍司令官（湯恩伯將軍の朋友）のお世話で背広と自動車を借用し、上海市内の見物をし、夕食を共に出来たことは望外の幸運で、二人で奇遇を喜びあいました。

当時、上海は戒嚴令がしかれ、中共軍の侵攻があるのではないかと噂が流れていました。

今は戦死傷者の冥福を祈るのみです。

一番残念なことは何でしたか。

医療器具の不備と医薬品の欠乏です。このため助か

る兵の多くを死なせました。悔やんでも悔やみきれません。

—どうも有難うございました。

歩兵第百三十三連隊 衡陽攻略 の死闘

三重県 浦田 幸一

—本日は第一三三連隊の衡陽攻略戦で、第一線で直接戦闘に参加した、生き残りの浦田さんに細かいお話を伺いたく参りました。

企画をしていただいた、当時の連隊本部におられた萩原さんにもご同席をいただきました。浦田さんは何年徴集兵でしたか。

大正十一年一月二十五日生れですから、昭和十七年徴集の現役です。同十七年十二月十日、三重県久居の留守部隊に入営したのですが、徴兵検査で、内地・外地の希望を聞かれ、当時私も張り切っていましたので、

その時点で「外地希望」と言い合格したのです。

十日後の十二月二十日出発、朝鮮・満州・北支經由で浦口から揚子江の対岸の南京に着きました。南京で正月を迎えて、上流の銅陵と大通の間の鉄鉞山という所で編入され、六ヵ月間教育を受けたが、三ヵ月が基本、三ヵ月が実戦を交えた教育です。夜間の戦闘や歩哨にも立ち、討伐にも度々出ました。そこで実弾の音を聞いて、初めは頭を自然とすくめる。その討伐で初めて、ヒューンヒューンという、高い弾でもです。

私は第九中隊（第三大隊）に入り、西口少尉が教官で、その当番になった。教育中も、半年後の常德作戦の時もそうでした。この作戦はひどい作戦だったが、昭和十八年の十一月雨期でした。

明日総攻撃という前日、西口少尉に付いて、上陸地点を偵察に行く途中、P51戦闘機の銃撃により少尉は足に貫通銃創を受け、漢口陸軍病院まで、私も一緒に下って、早く内地還送された。

そのことが、私にとっては運が良かったわけです。常德へ行ってクリークを渡って総攻撃をする前に病院